

乃木希典の靈よ、目覚めよ、戦争は終わった

——あなたの纖細で高雅な魂の時代が始まった

Greatchain

June 5, 2025

私は子どもの頃（昭和初期）から乃木希典という人を、親戚のおじさんか誰かのように敬愛していた。買ってもらった講談社の絵本の内容は、ほとんど忘れたが、心優しく、気品ある、それでいてあるべき最高の軍人としての乃木の像は、今も私の中で変わっておらず、変える必要もないと思っている。彼は大日本帝国陸軍の絶好の看板として、最大の利用価値をもつものであった。にもかかわらず、そして司馬遼太郎などの彼への批判的見方にもかかわらず、私の彼への親しみはますます深いものとなっている。

記憶ははっきりしないが、30年ほど前に、私は京都にある「乃木神社」を訪れたことがある。私以外に参詣者は一人もおらず、わずかの色褪せ朽ちかけた遺品が陳列してあった。この静寂は、彼が初めから希望していたものだ、と私は思った。

彼は戦争が下手だった。そのために死ななくてもいい大勢の将兵を死なせた（二人の息子を含めて）。おそらく彼は、卑怯な騙し討ちのようなことができなかつたので、どこまでも正攻法で攻撃したのではなかろうか？ 彼が敵に「勝って」凱旋したとき、馬上の頭を垂れたまま、上げることはなかつたと言われる。誠実で朴直で心の優しい乃木は、国民の誰からも愛され、特に明治天皇からは、ほとんど溺愛されたようである。天皇の崩御とともに、夫婦ともども「殉死」したとき、彼はやっと荷が下りたと思ったであろう。この殉死はあきらかに「自己処罰」の意味があった。

彼は軍人として一生涯、重荷を負い続けた。そもそも始まりは、西南戦のとき、明治天皇から賜った軍旗を、敵方に奪われたときだといわれる。これは当時、死に値するような重い過失であった。それ以来、日露戦争では実質的に失敗し、最後に自決するまで、彼は心が晴れることがなかつたと思われる。彼は軍人より、「国漢」の教授にふさわしいような存在だった。

おそらく生涯にただ一度だけ、彼の心が晴れたことがある。それは下のような、絶妙な漢詩（七言絶句）を得たときである：——

山川草木転（うたた）荒涼

十里風腥（なまぐさし）新戦場
征馬不前（すすまず）人不語（かたらず）
金州城外立斜陽（しゃようにつたつ）

他にも作品があるがこれが最も有名で優れているだろう。これは漢詩の約束を、形式としても内容としても見事に満たしている。これは、苦しく残酷な戦争のありさまを、その渦中にありながら、簡潔にしかし十分に描いている。これはおそらく、ほとんどあらゆる人を圧倒し感嘆させるだろう。そして詩とは、芸術とは、何であるかを的確に物語るものである。面白いことは、誰もこれ読んで、「死ぬか生きるかの戦争をしているのだ、詩など作らないで、もっと真剣に行動せよ」とは言わないことである。

私の言いたいことはそのことに尽きる。詩や芸術の目的は、自分の苦しみや差し迫った死さえ無視して、それを美しいものに変えることである。これは痩せ我慢ではない。魂の尊厳というものを、それを知らぬ人々に見せてやること、そしてそのことによって、自分のために人の不幸をつくり出す者たちに、恥を搔かせてやることである。今そのことについての覚醒が、世界中で始まっている。乃木希典は生きている。彼は一篇の短い詩によって世界を救った。彼は、人間の知性と感性のレベルの高さによって、平和主義によって、この野蛮な世界との格差を見せつけたのである。

かりに乃木の代わりに、猛々しく権謀術数に長けた軍人がいて、彼がロシアを簡単に打ち負かしたとしよう。我々は彼に感謝はするだろうが、彼が永遠の平和をもたらしてくれたとは思わないだろう。もし我々の世界が、昔と変わらぬ戦国時代のような世界なら、この軍人は感謝されるかもしれないが、我々は戦国時代を卒業したはずなのである。だから戦国時代しか我々の生きる世界はありえないという人々に、静かに別次元の世界に去っていただくより方法がないのである。

「闇の勢力」と言わせて、分断によって世界をコントロールしようとする者たちは、乃木希典を弱者とも阿呆とも呼ぶだろう。しかし私は彼らに問う。あなたたちに乃木の詩を理解できるのか？ あなたたちは乃木の詩を拒絶し、巧みな陰謀や騙しによって世界を操ろうとするが、それが不可能であることを知らないのか？ なぜなら詩や芸術は、創造者の側にあって、あなた方の側にはないからである。あなた方は創造者に逆らって、自然に逆らって、生きていくことできない。あなた方は、創造の喜びにも美しさにも預かることはできない。争いだけに明け暮れて生きていかなければならない。

乃木希典と私は、性格も境遇もよく似ていると思っている。彼はあらゆる人々から愛され、純粋な愛で繋がった明治天皇は、彼にとって神だった。天皇が崩御されると、生きる意味がなくなった。私もそのように、人々に愛され、神々に愛され、神に愛されて生きている

ことが、時間とともにますます明らかになった。それは宿命として避けられず、責任として私に掛かってくる。しかしそれは、厳しい定型詩を愛する私の喜びでもあり、私は自由を享受している。さらに私には特別のことが起こっている。誰であれ、私に敵意を向ける者の力を、私は挫いているようであるが、これは私の与り知らぬ所で起こっている。

ひとつ補足すると、乃木の七絶の結句「金州城外斜陽に立つ」は、「自己劇化」というべきもので、その美しさは人を魅了するが、これは杜甫=私の詩でも常套手段になっている。これは「春望」すなわち「国破れて山河在り」の翻案で、全文が簡単に検索できる。

Spring View
(from Tu Fu's 春望)

Though war has devastated towns and souls,
Those mountains, rivers, woods remain unchanged,
And spring has greened the broken Changan walls;
One weeps o'er flowers because of those estranged,
And songs of birds add gall to sorrows old;
The raging fire has run well into March,
Letters from home are worth a stack of gold;
Now land and heart and hair are left to parch—
What whiff of hair I have won't hold a pin,
Which violently I scratch as from my sin.